

中国古代燭台



图3 陶製 漢代

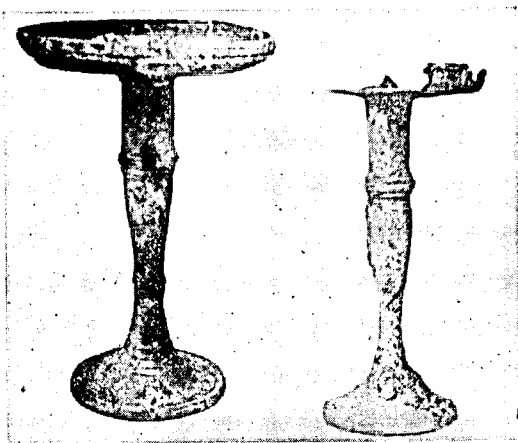


图1 青銅製 戰國時代

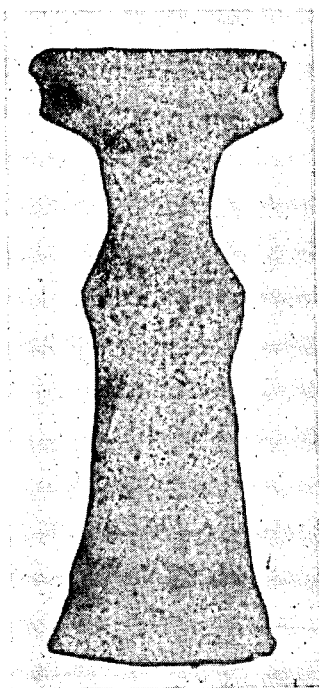


图4 陶製 漢代

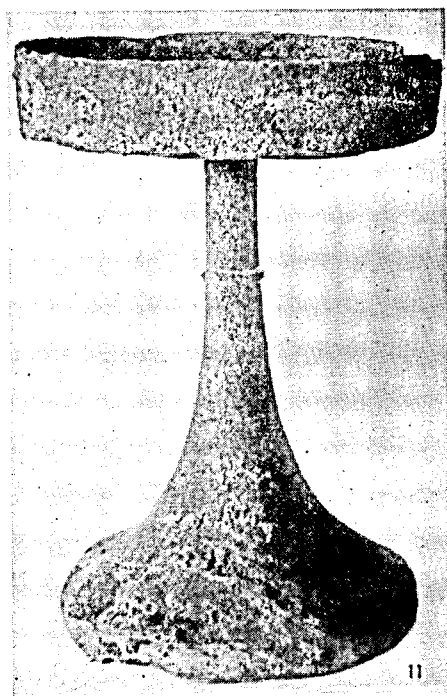


图2 青銅製 漢代

中國古代燭台

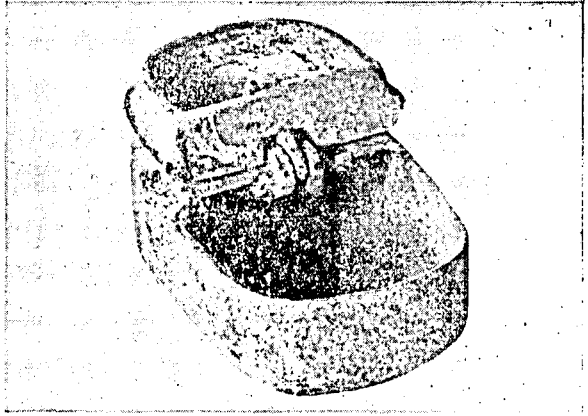


圖5 青銅製 戰國時代



圖6 青銅製 戰國時代

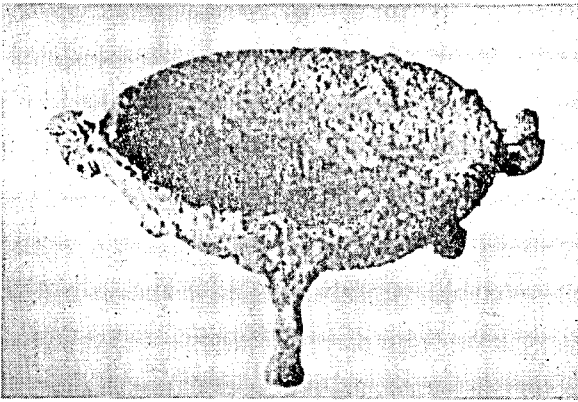


圖7 青銅製 戰國時代

東と西（二） 蠟燭の起源

原 田 淑 人

私は昭和二十四年、八学会（九学会）の総会の際「火」という共同課題で、蠟燭の起源について講演を行い、その概要を人類科学第二集（昭和二十五年十一月刊）に載せておいた。その後、この概要に記した考察は、学説として一般に認められているようである。しかし記事があまり簡単であり、それに挿図もないので、ここに本誌をかり、さらに気付いたところを補足して、この問題に再検討を加えることにした。

脂肪酸やパラフィンなどを原料とする近代的蠟燭は、十九世紀になってからの産物であって、それまでには幾多の変遷を重ねたものである。まずわが国の蠟燭から筆を起すと、戦国時代から江戸時代にかけて、和蠟といって、黄蘗（はぜ）の実を原料とするものが行われ、室町時代には、松脂蠟といって、笹の葉で松脂を包み、玉蜀黍の毛を心（しん）にしたものが行われ、更に遡って藤原時代には紙燭すなわち松材をほそく剥ぎ、長さ五〇センチ位に切って、これを適宜の太さに束かね、その先端に松脂を塗り、そしてその手元に紙を巻いたものが行われた。これ等の蠟燭は何れもわが国で考案されたものであって、平安朝中期以来、中国からの輸入蠟燭が杜絶した結果に外ならない。奈良朝から平安朝の初葉にかけては、中国から蜜蠟を原料とする本格的な蠟燭が輸入され、宮廷や寺院などで使用された。

天平十九年(七四七)二月十一日に記るされた大安寺伽藍縁起并流記資財帳に次の記事がある。

(前略)

合鷓鴣肆拾斤捌兩

(後略)

右平城宮御宇 天皇以養老六年歲次壬戌十二月七日納賜者

右のうち鷓鴣とあるのは鷓(蠟)燭の誤字であるこというまでもない。養老六年(元正天皇朝七二二)は中国唐の玄宗開元四年に当たる。また大宝令(職員令)主殿寮の条に、主殿頭の職としてその掌るところの項目を挙げているが、そのうちに供御の「燈燭松柴炭燎」が見えている。なお後宮殿司の尚殿の職掌にも、「燈油火燭薪炭之事」があり、また東宮主殿署の首の職掌にも、「燈燭」の事が見えている。右燈燭とあるのは、令義解に、「油火を謂って燈となし蠟火を謂って燭となす」と注する通り、当時宮廷に於いて蠟燭の使用されていたことを明示するものである。わが大宝令の唐制に倣っていることは言うまでもないが、唐六典内官尚寝の条に、司燈が燈燭膏火を掌ることを記している。奈良朝の頃には中国の宮廷に於いても、蠟燭が燈火と共に主要な照明であったことが推察される。

この頃の蠟燭の形状はどうであつたらうか。金剛界曼荼羅の金剛燈菩薩の三昧耶形(さまやぎょう)に、蓮葉または蓮花状の燭台にもされた蠟燭を描いているが、あまり後世の蠟燭と違わぬことが認められる。三昧耶形の図像は平安初期にのぼり、神護寺曼荼羅を以て最古のものと考えられ、そして三昧耶形が唐代中国で創案されたものと推察されるから、これによって八―九世紀に於ける東アジアに行われた蠟燭の実態を把握することができるのである。また時代は藤原末期にさがるが、現に京都大学に所蔵される平信範自筆本とされる兵範記に、長承元年(一一三二)七月七日の乞巧奠の行事を記しているが、そのうちに「立燈九本三行亦之有打敷」とあつて、左・右・中央三行合せて九本の燭

台を並べている。燭台は細長く、それに後世と同形の蠟燭がともされている。蜜蠟の蠟燭は前述の如く中国からの輸入に待たねばならなかったから、わが国では蠟燭の価格は相当高かったであろう。然らばわが国の蠟燭の起源をなした中国の蠟燭はいかなる生い立ちをなしたものであろうか。項を改めて次に述べて見よう。

二

宋の程大昌はその著、演繁露卷二に、儀礼の燕礼(賓客を饗応する礼法)に「大燭を庭に執る」「大燭を門外につくる」とあるのを論じて、

古の燭は未だ蠟を用ゆることを知らず、直ちに薪蒸(しんじょう)たきぎ(をもちゆるなり、すなわちこれ柴を焼き明(あかり)を取るのみ、また或は樺の皮を剥ぎ、これを熱(や)くなり、

というている。しかし彼はまた礼記の曲礼に、「燭は跋(ふつ)を見(し)めさず」とある跋を蠟燭の燃え残りとも解し、或は曲礼の作者が、まのあたり蠟燭を見ていての言ではなからうかといひ、一部の疑問を残している。然るに元の陳澹は、その礼記集説に、曲礼の同じ句を解し、

跋(ふつ)は本(もと)なり、古未だ蠟燭あらず、火炬(かきょーたいまつ)を以て夜を照らす、(蠟燭の)まさに尽きんとするとき、その余すところの残本(燃え残り)をかくす、客のこれを見て、夜の久しきを以て、辞退せんとすることを恐るるなり、

といひ、跋を明かに松明の残り屑と見、これを隠くし、新たに松明を燃し、賓客をして夜のふけることに気付かれないようにするのだと説いているのである。恐らく程氏の前説並に陳氏の説を以て妥当とすべきであろう。さはいえ、周代の中国に、果して蠟燭があったか、なかったか、儀礼や曲礼の如き古文獻では決定し兼ねる問題である。今

これを蠟燭と切っても放せない燭台(蠟燭立て)の遺品に徴すると、現在のところ、殷代や周代の悠古に遡り得る、確かな遺品を認めることができない。その初めて實在を明かにし得るものは、周末(紀元前三世紀頃)から前漢にかけてのことである。以下木簡の挿図の順位に従って燭台数個を例示しよう。

1 青銅製燭台二基(挿図1、1から7までは口絵)

右方のものは、高さ三三・〇センチ(ホワイト師はインチ尺を使用している)、今便宜上メートル尺に換算した)、皿の径一七・八センチ。左方のものは、高さ二二・八センチ、皿の径一四・六センチ。共に河南省洛陽県金村所在の、戦国末から前漢初に亘る古墳群より発見されたもので、中央に節を持つ台脚上に円形の皿をつくり、その中心に蠟燭の下孔に挿込む突起を設けた、燭台として最も普遍的な形状を示している。

2 青銅製燭台(挿図2)

高さ一六・二センチ、皿の径一一・二センチ。朝鮮平壤府外染浪時代漢墓出土にかかる。台脚が大きくラップ状に開いた、安定感のある燭台である。⁽³⁾

3 陶製明器燭台(挿図3)

高さ一三・六センチ。中国東北地区(旧南滿洲)遼陽漢墓からの出土である。本器はいわゆる明器で、特に副葬用として青銅製品を換作したものである。前者が蠟燭の底孔に挿し込む突起を設けているのに対し、これは筒状をなし、その中に蠟燭を挿し込むようにできている。現在でもこの種の青銅製燭台が行われている。⁽⁴⁾

4 陶製明器燭台(挿図4)

高さ一〇・六センチ。河北省昌平県漢墓発見と伝えられている。前者同様筒形をなしている。⁽⁵⁾

5 青銅製燭台(挿図5)

高さ一一・四センチ、幅六・九センチ、深さ三・五センチ。河南省洛陽県金村出土。全形楕円状を呈し、上板下部を蓋とし、蝶番(ちょうつがい)によって上方に跳ねあがる。そして蓋裏が燭皿の用をなし、その中心に突起を設けている。その構造すこぶる精妙で面白い。本器の最も注目すべき点は、燭皿に蠟痕を残留することであって、この種の燭台が明かに蠟燭の使用に供されたことを如実に物語るものというべきである。⁽⁶⁾

6 青銅製燭台(挿図6)

高さ九・一センチ、長さ五二・〇センチ、皿の径一三・〇センチ。金村出土。中央台脚の上に円形皿を取りつけ、さらに台脚の左右に枝を出し、各円形皿を取りつけ、なお中央の皿の側面に方形のソケットを出し、これに木柄を取りつける装置をなしている。雅趣まことに愛すべきものがある。⁽⁷⁾

7 青銅製燭台(挿図7)

高さ五・七センチ、皿の径九・一センチ。金村出土。円形皿の中央に突起を出している、燭台として普通の形態であるが、その両側に耳を作り、また獸足状の三脚を備えているのが特色である。⁽⁸⁾

以上は戦国から漢代にかけての燭台の数例を挙げたに過ぎなく、近年漢代遺跡から青銅製・鉄製その他明器陶製の燭台の発見されるものが決して少くない。これ等の燭台の装置から推察すると、その頃の蠟燭の形状は、後世の蠟燭のそれとあまり違っていないかたようである。漢以後蠟燭の使用益々多くなり、五世紀になると、南朝あたりの文人は、蠟燭に刻み目を入れ、時刻を限って詩賦を作ることが流行したが、詩人周庾信の対燭賦に、「心を剪る」とか「涙蠟」とかいつているのも、当時の蠟燭が後世と略同様であったことを示唆するものである。

次に蠟燭の原料である蔞蜜(蜜蠟)について一考してみよう。古代中国に於ける蔞蜜は野生の蜜蜂の巣から採った、いわゆる石蜜に水を加えて蠟分を取ったもので、そのままのものを黄蠟といい、晒白したものを白蠟と呼んだ。現在欧米並にわが国の黄蠟や白蠟は、殆んどヨーロッパ産の飼育蜜蜂の巣から採ったものであるが、中国の蔞蜜はこれとは多少性質を異にしている。現にわが正倉院には奈良時代の蔞蜜を保存しているが、恐らく唐からの輸入品であろう。すでに述べたように中国の蔞蜜が野生蜜蜂の巣から採集したとすると、その産地がおのずと限定されるのは当然である。晋(三世紀)の張華は、その著博物志に、蔞蜜採集法を述べて、

もろもろ遠方山郡の幽僻の処に蜜蔞を出だす、人往往桶を以て蜜蜂を捕え、毎年一たび取る、……遠方の諸山蜜蔞の処、木を以て器をつくり、中に小孔を開き、蜜蔞を以て器の内外に塗ってあまねからしむ、春月、蜂まさに生育せんとするとき、三兩頭を捕え取り、器中におく、蜂飛び去り、尋いで(仲間を)伴い来り、経日漸く益す、(人)遂に器を持って帰る、

と述べている。すなわち古代中国人の蔞蜜の採集法であるが、その産地が主として僻遠の地方にあったことを示している。梁(五世紀)の陶弘景は、その著、名医別録に、蔞蜜の産地として武都の山谷を挙げている。武都は甘肅省成県の西部地方である。唐代になると、蔞蜜は薬用・鑄型・蠟燭等に供せられ、その需用がすこぶる増大したと見え、その産地並に朝廷への貢献の文献に見えるものが少くない。唐六典や杜氏通典によると、今の山西・安徽・四川・湖北・湖南・陝西・貴州・福建等各省の山地に跨り、貢献の斤量も相当多額に上っている。しかし明かに蠟燭を製造して朝廷に貢献した地方は、唐六典の示すところによると、山南道の鳳州(陝西省鳳泉)並に隴右道の成州(甘肅省成

県)及び武州(甘肅省武都)である。甘肅省の武都はすでに梁の陶弘景が麝蜜の産地として挙げた唯一の場所であつて、古来蠟燭の産地として有名であつたものではあるまいか。なお蠟燭の産地を詮索する上に注意すべきは、西京雜記卷四に見える記事である。すなわち、

閩越王、高帝に石蜜五斛・蜜燭二百枚・白鵲・黒鵲各一双を献ず、高帝大に悦び、厚く報いその使を遣る、

と見えてゐる。西京雜記は果して何処まで漢代の事実を伝えているのか、幾分か不安はあるが、若しこの事実が真であるとすると、その貢獻物がすこぶる異国的情味をただよわせ、同時に漢の高祖の満悦も想像するに難くない。閩越は福建省であり、閩越王於諸(おしよ)は漢の高祖から王に封ぜられた越人で、史記東越伝の賛にいう通り、蛮夷に属する種族である。そして彼から貢獻した石蜜も蠟燭も、当時にあつては中国にとって珍貴なものであつたに違いない。唐代こそ福建省は麝蜜の一産地に数えられているが、漢代に果してその産出地であつたか疑わしい。その後梁の簡文帝(五世紀)はその列燈賦のうち、

南油俱に満ち、西漆争つて燃え、蘇は安息に徴し、蠟は竜川に出づ、

と詠じてゐる。蘇は紫蘇で、それから油を取るのである。安息は漢代のパルティアで、梁代にはパルティアは亡んでゐるが、ここではベルシア地方を指しているのであろう。蠟はこの賦ではもちろん蠟燭を意味しているのであつて、竜川は広東省に属する地名である。

思うに中国古代にあつては、蠟燭の製造地として甘肅陝西の如き西域方面に近い地方と、福建広東の如き南海に臨んだ海国であつたように想像され、何となく蠟燭の製造技術が中国の独創ではなく、他民族からの伝来であるやの疑念を生ぜしめるものがある。

四

中国の戦国末漢代初期と殆んど時を同じくして西方ギリシア・ローマ人の間にも蠟燭が出現したのである。ギリシア盛期にあたる前五世紀頃には、中国の場合と同じく松明(torch)が用いられ、樹木の皮・葡萄の蔓その他蜜蠟や脂肪を塗った木片を束ねたものであって、時にはこれを受ける燭台様のものもあつた。

8 陶製化粧箱に描かれた結婚行列図(挿図8)

ギリシア盛期の作品で、大英博物館の所蔵である。祭壇に導かれる新郎新婦を描いたもので、そのうちに松明をかざして彼等を案内する婦女子の姿が見えている。⁽¹⁰⁾

9 陶壺に描かれた競走者の図(挿図9)

ギリシア盛期に於ける競走者を描いたもので、それぞれ手に持つ松明には、それから流れて垂れる蠟を受ける燭台を備えている。⁽¹¹⁾

かくてギリシアの盛期前五世紀頃には専ら松明を用い、まだ純然たる蜜蠟燭は製造されていなかったのである。然るに、前三世紀になると、明かに純然たる蠟燭が認められるのである。

10 オルビエー・ゴリニ墳墓壁画の饗宴図(挿図10)

イタリア・エトルリア地方に存在するエトルスク民族の墳墓には風俗画を描いたものが少くないが、オルビエーのゴリニ墳墓壁画に饗宴の図があつて、飲食器をのせたテーブルの前後に、丈高い燭台が置かれている。この燭台の各の頂上には、三つの嘴状の肘金が出ていて、それに夫々蠟燭が横挿しに支えられている。この種の燭台はポンペイ遺跡から、その実物が発見されているが、この図によってランプを懸垂するものではなく、燭台として使用されたこと



図 8 ギリシア陶製化粧箱に描かれた結婚行列図

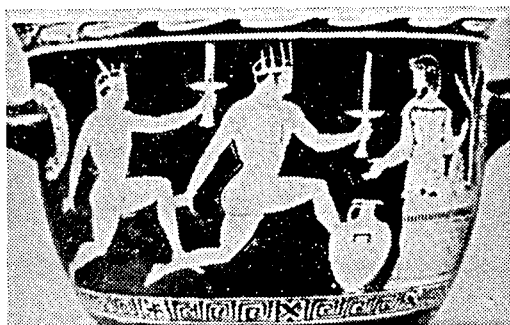


図 9 ギリシア陶壺に描かれた競走者の図

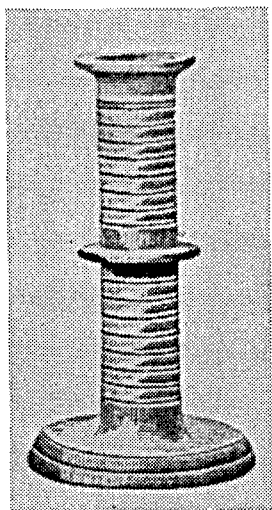


図 11 青銅製燭台 シリア出土

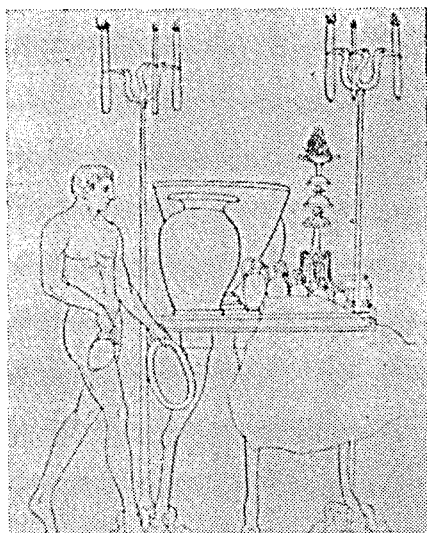


図 10 エトルスク墳墓壁画饗宴の図

が分かる。この壁画は前三世紀の作で、エトルスク人はギリシア文化の受容者で、恐らく当時ギリシア人も蠟燭を使用していたであろう。⁽¹²⁾

11 青銅製筒形燭台(挿図11)

シリアから発見されたもので、或はローマ時代のものであるかも知れない。筒形で、すこぶる現代的な感覚を与えらる。大英博物館の所蔵にかか⁽¹³⁾る。

ローマ人は蠟燭を使用した⁽¹⁴⁾が、プリニウスの言に従えば主として宗教用として点火され、一般の家庭には行われなかったようである。ポンペイの遺跡からも、ランプ台に交って少数ではあるが、蠟燭立ても発見されている。

12 青銅製燭台二基(挿図12)

左方のものは、高さ二・八メートルを数え、基部は三個のスフィンクスを以てこれを支え、中央部に三羽の鶴を飾った、円柱を立てている。円柱には葡萄唐草を繡刻し、その頂上に花形の受け皿を設け、その中心に蠟燭を挿し込

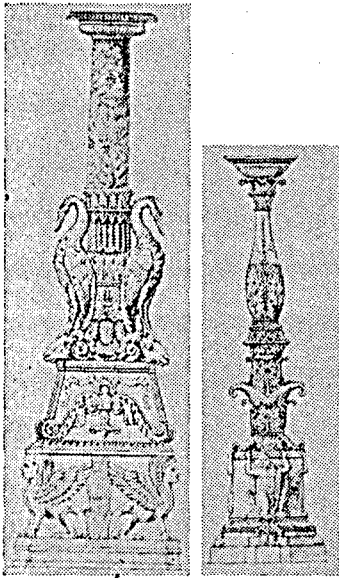


図 12 青銅製燭台 ローマ時代

む突起を出している。ナポリ博物館所蔵にかかり、すこぶる豪華な作品である。

右方のものは、高さ一・九九メートルあり、基部に三婦女像を配し、円柱には幾枚も優雅な花形を飾り、その頂上に花形の受け皿を備えている。ルーブル美術館の所蔵である。⁽¹⁵⁾

そもそも蜜蠟 (bee-wax) は早く古代エジプト人に知られ、これを以て小神像や、ミイラに供える果実など

を造り、ギリシア人もこれを以て小神像や玩具用人形を製作した。またローマの貴族はこれを以て父祖の死面をつくり、家に珍藏した。蜜蠟は高価で、容易に入手し得なかつたために、蠟燭として濫用することは不可能であった。そして蠟燭が一般に使用されるようになったのは十五世紀になってのことで、蜜蠟の価格が安くなったために外ならぬ。

五

さて蕙蜜(蜜蠟)は古代諸民族にとって貴重なるものであつて、その入手に相当困難を感じたようである。まして蠟燭の如きは劃期的發明で、文化の進展に大に寄与したものであつて、その初めは驚異的照明として一部階級の間に行われたに過ぎない。そして上叙のような發達の経路をたどつたものとする、中国にしてもギリシア・ローマにしても果して二元的に各自それぞれが創造したものであろうか。しかも等しく紀元前三世紀頃東西兩民族の間に期せずして發明されたであらうか。この時代に於いてすでに東西民族間によしんば間接であらうとも、明かに文化の交流のあつたことは、本論第十八集「玉(Jade)の道」に述べた通りである。蠟燭の起源についてはたとえ東西何れがその本源をなしたか今のところ一応その決定を差し控へざるを得ないが、その可能性は認めておくべきであらう。なお中国とギリシアとの直接關係を考える外に、第三者にあたる中間民族がいて、そこから東西に向つて蠟燭を伝播したのとも想像されぬこともない。今その類例として双六(すごろく)の如き博戯に使用する賽(さいころ)について一言して置こう。

六面体に一から六までの数を点在した賽(Die)はギリシア人やローマ人の間に盛んにもてあそばされ、その遺品は許多発見されている。ギリシアの史家ヘロドタスは賽の起源をリディア人に歸しており、しかもその遺品が多くアジ

アの西部から発見されるので、ヘロドタスのアジア起源説を肯定せしめるものがある。また一方中国では賽を骰子(とうし)といい、その起源を胡国とし、その伝来年代を後五世紀にあたる北魏としている。それは双六(すごろく)に伴って伝来したのである。胡国は中央アジアまたはインドを指したものでらしい。アジアに於いて古来博戯を愛好する民族はインドであつて、賽のことはすでに古典リグ・ヴェーダに見えているから、その淵源は極めて遠い。中国の賽の实物はイギリスのスタイン氏が唐代と思われる骨製品や石製のものを中央アジアのミラン等で発見し、またわが正倉院には牙製のものが現存している。ギリシアの賽もまた中国の賽も恐らくともにその起源をインド方面に持つものであつて、そこから東西に向かつて転がったのである。なお今一つの例を打毬(ポト)に取つて参考に供して見よう。

打毬は古来ベルシアの国技であつて、早くもアケメネス朝(前六世紀)に行われた。打毬はここを本源として西はヨーロッパに伝わり、ホッケイ・クリケット・ゴルフ等の母胎をなし、ポロそのままの競技は現になおスコットランドの国技として行われている。また東はチベット・中国・朝鮮並にわが国に及んでいる。⁽¹⁷⁾

かくの如き例は他にもあつて、中間に本源を置き、それから東西に流れる文化要素のあつたことは決して珍らしくはない。

要するに時を同じうして、蠟燭が東西両洋に二元的に考案されたことについてはすこぶる奇異の感を懐かざるを得ない。本篇はただ東西両洋に於ける蠟燭の沿革について事実のみを述べ、その間の連繋の有無については他日の考究に俟つこととした。

註

- 1 三昧耶形とはいわば菩薩などの持物等によってそれを象徴した形を指すのである。なおこれについては大正版大藏経図像一

- を参照された。
- 2 W. Charles White: *Tombs of Old Loyang, Shanghai, 1934.* 参照。本篇挿図1及び5・6・7はこの書から採った。
 - 3 藤田亮策・梅原末治編・朝鮮古文化綜鑑第二卷（昭和二十三年）を見よ。
 - 4 駒井和愛編・遼陽發見の漢代の墳墓（考古学研究第一冊・昭和二十五年）参照。
 - 5 東大考古学研究室蒐集品・考古図編第十三集（昭和二十八年）を見よ。
 - 6 註2を見よ。
 - 7 同前。
 - 8 同前。
 - 9 朝比奈泰彦編修・正倉院藥物（植物文獻刊行会・昭和三十年）藟蜜各項を繕かたいたい。
 - 10 *Greek and Roman Life. British Museum, 1920.* 見よ。
 - 11 W. Zschielzschmann: *Hellas und Rom. Tübingen, 1959.* 見よ。
 - 12 この壁画はヒトリスクの絵画として諸書に引用されている。本篇には今でも生命ある R. Engelmann: *Griechen und Römer. Berlin, 1893.* の挿図から採った。
 - 13 註10と同じ。
 - 14 *Encyclopedia Britannica* の引へるものを見よ。
 - 15 註12と同じ。
 - 16 拙稿「正倉院御物を通して観たる東西文化の交渉」（史学会編東西交渉史論・昭和十四年。東亜古文化研究収録）を見よ。
 - 17 拙稿「八世紀前後に於ける國際競技の二三」（歴史教育第三卷第六号・昭和三十年。東亜古文化論考収録）参照。